

《翻 訳》

グリフ・リス・ジョーンズ著『イギリス名詩選』

久保田 恵 理

A Japanese Translation of The Nation's Favorite:  
Poems by Griff Rhys Jones

ERI KUBOTA

キーワード

英詩 (English Poetry), 翻訳 (Translation), ウィリアム・ブレイク (William Blake), ウィリアム・ワーズワース (William Wordsworth)

13. ファーンヒル

ディラン・トマス

私は明るい家のリンゴの枝の下で  
葉が青いくらい若くて単純だったので  
幸せで  
星の多い溪谷に広がる夜  
全盛期の黄金に目を輝かせ  
時間は私を舞い上がらせた  
荷馬車の中で名誉に思い私はそのリンゴの町の  
王子だった  
かつて帝王のように私が木も葉も持っていたとき  
ひなぎくと大麦の小道を追って  
棚ぼたの光で輝く川を下る。

それで私が未熟で注意がなかったことは納屋の  
あたりでは有名で  
幸せな庭で農園を家だと思って歌っていた  
時間はかつて一度だけ若かった太陽で  
私を遊ばせてくれて  
時間が言うところの恵みという意味で黄金だった  
私は未熟で前途有望な狩猟家で牧夫だった  
小牛は私の角笛に合わせて鳴き、丘の狐ははっ

きりとした声でよそよそしく吠え  
安息日はゆっくりと鐘が鳴り  
神聖な小川の小石の中に響いていた。

太陽が長く広がっていて、それは美しく  
干し草畑は家の高さぐらいまで伸び、煙突から  
調べが流れ、  
それは大気で漂い、美しく、水のように  
草のように緑に燃ゆる火。  
夜に出る純然たる星のもと  
馬に乗って寝に行くとフクロウが農場を離れ  
月の出ている間、耳を傾けると、馬小屋の間で  
祝福されて  
夜鷹が干し草の堆積とともに飛び上がり、馬は  
暗闇の中へと閃き去った。

それで目が覚めると、農場が露で白くなった放  
浪者のように戻ってきて  
肩に雄鶏を乗せていた それは輝き、  
アダムと乙女であって  
空が再び迫り  
太陽が一面いっばいに広がったので  
純然たる光の誕生の後に違いなかった  
最初に、糸紡ぎのようにぐるぐるした場所を、  
魔法にかけられた馬が歩いている

温まり静かに鳴来ながらその緑の馬小屋を出て  
賞賛の草原の上に行く。

心臓が長く保つくらい  
出来たばかりの雲の下陽気な家の  
そばでキツネとキジの間では敬意を示されて  
幸せで  
繰り返し生まれる太陽のもと  
私は無頓着な道に走った  
草の伸びた家を通り抜けて私の願いは疾走し  
私は何も注意しなかった 青い空の  
移り変わりを  
時間が許す調子の良い旋回がほとんどない  
こうした朝の歌のなかで未熟で前途有望な子どもが  
恩恵なく彼を追いかける前に。

私は何も注意しなかった 子羊の白い日々  
そして時間は私を連れて行った  
私の手の影のところにたくさん集まったツバメ  
のところへ  
いつも登っている月の中にも  
寝るために馬を走らせることもなく  
私は高い平原に彼が飛ぶのに耳を傾けるべきで  
目覚めて  
子どものいない土地から永久に逃れて農場に  
来るべきだ。  
ああ 私は慈悲という意味のもと若くて単純  
だったから  
時間が私に未熟さと死をもたらした  
鎖に縛られて私は海のように歌っていたのだが。

#### 14. 休暇

ウィリアム・ヘンリー・デイビス

この人生は何だろうか、もし 注意いっばいに  
ただ立ってじっと眺めている時間がなかったら。

枝の下に立って  
羊や牛と同じくらい長くじっと眺めている時間  
がなかったら。

わたしたちが木の間を通り抜けるとき  
りすが木の実を草むらに隠すのを見ている時間  
がなかったら。

日中の広がりの中、夜の空のように  
星いっばいの流れを見ている時間がなかったら。

美人を一瞥している時間がなかったら  
彼女の足の動きを見たり、どうやって踊るかを。

彼女のひとみがはじめたほほえみを  
口がゆたかに表現するまで待っている時間がな  
かったら。

なんて貧相な人生だろう、注意いっばいに  
立ってじっと眺めている時間がなかったら。

#### 15. 追い剥ぎ

アルフレッド・ノイズ

風は突風の吹く木の間に唐突な暗闇をもたらし  
月は幽霊のようなガリオン船が雲の多い海に投  
げ出されたようで

道は紫の湿原に月光の一筋の光があるようで  
追い剥ぎは馬に乗って来た

走って 走って

追い剥ぎは馬に乗って来て、古い宿の入り口の  
扉のところで止まった。

彼は頭にフランスの三角帽を被せていて、

顎にモールの房を飾り

赤紫色のベルベットのコート、茶色い雌鹿の銃尾  
それらはしわには似合わなかった。ブーツは  
固く締めあげられていた！

彼は輝く空の下、宝石のように輝きながら乗っ  
ていて

ピストルの台尻は輝いていて  
レーピアの柄は輝いていた。

小石をカタカタ鳴らし暗い宿の庭でガチャンと  
音をさせて

鎧戸を鞭でたたいたが  
施錠され門がされていた  
誰かが待っているはずだった  
窓のほうに向かって口笛で曲を吹くと、  
そこに黒い瞳の主人の娘が  
      ベスは主人の娘で  
暗く赤い恋結びを彼女の長い黒髪に編み込んで  
いた。  
古い宿の庭は暗くしっかりした門がキーキー  
鳴って  
ティムという馬丁が聞いていた 彼の顔は白く  
てやせ衰えていた  
彼の瞳は狂気でうつろで、かび臭いほし草のよ  
うな髪の毛  
しかし彼は主人の娘を愛していた  
      主人の赤い唇をした娘を  
犬のように口がきけずに耳をすませ、その泥棒  
が言うのを聞いていた

「わたしの可愛いお嬢さん、今夜キスしてほしい  
朝日が昇る前イエローゴールドとともに  
もどるだろう  
しかし、もし彼らが私を鋭くせきたて、終始私  
を急がせるなら  
夜に私を探してくれ  
月明かりでよく私を探してくれ  
地獄が道を塞ぐだろうが月明かりでお前のとこ  
ろに行こう。」

彼は鐘でまっすぐ立ち上がった ほとんど彼女  
の手には届かなかったが  
彼女は窓辺で髪を解いた！彼の顔は燃え木のよ  
うに赤くなった  
香りの良い黒い小滝が彼女の胸から飛び出した  
ようだった  
月明かりの中でその波打つ髪にキスをして  
(ああ月光のもとの甘い黒い波！)  
月光の中彼は手綱を引っ張り、西へと  
大急ぎでかけて行った。

## II

彼は夜明けには来なかった 昼になっても来な  
かった  
黄褐色の日没を過ぎ、月の上がる前に  
一筋のジプシーが道を通ったとき、紫の湿地を  
輪で囲み  
赤いコートの一団が行進して来た  
      行進して来た 行進して来た  
ジョージ王の男たちが行進して、古い宿の扉の  
ところまで来た。

彼らは主人には何も言わず、代わりにエールを  
飲んだが  
彼女の娘に猿轡をして彼女の幅の狭いベットの足に  
彼女を縛った。  
彼らのうち二人は窓辺に跪いた、マスカット銃  
をそばに置いて！  
それぞれの窓に死があった

      一つの暗い窓に地獄があった。  
彼女の窓辺を通してベスは見る事ができた  
彼が走ってくる道を。  
忍笑いで雑談しながら、注目を引くために彼ら  
は彼女を縛った  
彼女のそばにマスカット銃をつけた 銃身を  
彼女の胸の下に！  
「今からよく見ておけよ！」と言って彼らは彼  
女にキスをした。

彼女は死の運命にある男が言うのを聞いた  
月明かりに私を探してくれ  
      月明かりで私を探してくれ  
地獄が道を邪魔するかもしれないが、月明かり  
でお前のところに行こう！  
彼女は後ろで手をひねったがすべての結び目が  
しっかり固定されていた！  
彼女は指が汗か血で濡れるまで手をもがかせ  
た！  
彼らは暗闇に広がり、まるで数時間が何年もか  
けて過ぎるみたいに  
腹ばいに進み  
今、深夜の打ち鐘

冷たい深夜の打ち鐘  
一本の指先がそれに触れた！ついに引き金が彼女の指についた！

一本の指先がそれに触れた 彼女はもはや休息のためにはもがかなかった！

上に、彼女は注意のために上体を起こした  
彼女は彼らに聞かれる覚悟はなかったのだろう  
再びもがくつもりはなかったのだろう

というのも道は月明かりでがらんとしていた

月明かりで空っぽでがらんとしていた  
月明かりの中彼女の静脈の血は恋人のリフレインに心をときめかせていた。

パカッパカッパカッパカッ！彼らは聞いただろうか。馬の蹄の音がはっきり鳴っている

パカッパカッパカッパカッ、遠くの方で？聞こえないほど彼らは

耳が不自由なのだろうか？

月明かりの一筋の光を下り、丘の頂上を超えて  
追い剥ぎが馬に乗って来た

走っている、走っている！

赤いコートは点火薬を見た！彼女は立ち上がり、まっすぐ静止した！

パカッパカッ、霜の降る沈黙！パカッパカッ、  
こだまする夜！

彼はどんどん近づいて来た！彼女の顔は明かりのようだった！

彼女の瞳が一瞬見開かれた 最後の長い息を吸った

彼女の指は月光に動き

彼女のマスカット銃は月明かりに衝撃を与えた

月明かりに彼女の胸を粉々にして彼に警告を与えた 彼女の死をもって。

彼は踵を返した 西へと急いだ 彼は誰が頭を垂れて立っていたのか知らなかった

マスカット銃の先の彼女の頭が彼女自身の赤い血で

ずぶ濡れになっているのを！

夜明け前になって彼は聞いて、ゆっくりと青白くなった

どうやってベスが、宿屋の娘が

宿屋の黒い瞳の娘が

月明かりの中彼女の恋人を見ていて、そこで暗闇の中

死んだと。

後ろへ、狂人のように走り抜け、空に向かって  
金切り声をあげ

彼の後ろの道は白く煙っていてレーピアを高く  
振り回した！

彼の拍車は黄金の昼に鮮血の赤であった。彼の  
ベルベットのコートは

ワインレッドであった。

彼らが街道で彼を打ち落としたりした時

街道で犬のように倒れて

街道で自らが流した血の中で横たわり、彼の喉に  
モールの房がかかっていた。

冬の夜の静寂さの中で、彼らは言う、風が木々の間を通り抜けるとき

月は幽霊のようなガリオン船が雲の多い海に投げ出された時に

道は紫の湿原に月光の一筋の光があるような時に  
追い剥ぎは馬に乗って来る

走って 走って

追い剥ぎは馬に乗って来て、古い宿の入り口の扉のところで止まった。

暗い宿の庭で小石を鳴らし

ガチャンと音をさせて鎧戸を鞭でたたいたが、

施錠されて門がされていた

誰かが待っているはずだったので窓のほうに向かって口笛で曲を吹くと、

そこに黒い瞳の主人の娘が

ベスは主人の娘で

暗く赤い恋結びを彼女の長い黒髪に編み込んでいた。

## 16. 恥ずかしがり屋の女主人へ

アンドリュー・マーベル

私たちは十分な世界、時間を持っていた  
この気恥ずかしさに罪はない、そうだろう？  
私たちは座り、そして考えるだろう  
どの道を歩いて私たちの長い愛の日を通り過ぎ  
るか。

あなたはインドのガンジス川のそばで  
ルビーを見つけるはずだ。私はハンバー川の流  
れのそばで

不満を言うだろう。私はその洪水の10年前に  
あなたを愛し、もしあなたさえ良ければ  
ユダヤ人が回心するまで  
あなたは拒絶するべきだ。  
私の植物的な愛は育つだろう  
帝国より広大に、かつゆっくり。

100年はあなたの瞳を褒めるために行くはずだ  
そしてあなたの額をじっと見つめる。

200年は互いの胸を敬愛するが  
3万年は休息する。

少なくとも一時期はそれぞれの場所で  
最後の時期はあなたの心を示すべきだ。  
あなたはこの状態に値する、そうでないなら  
低い割合でしかあなたを愛さない。

でも背中ではいつも聞こえる  
翼のある時間の馬車は近くで急いでいる  
私たちの前に全てが横たわる  
広大な永遠の砂漠。  
あなたの美しさはもはや見つけられないだろうし  
大理石の地下納骨所に私のこだまする歌が  
聞こえるだろう。それで蠕虫が  
あの長く保存された処女性を食べてみようとする  
あなたの古風な廉恥心も塵になり

全ての私の欲望も灰になる。  
墓の罰金と私的な場所  
思うに誰もそこで抱擁しない。

それゆえに、若者の色合いが  
朝露のように肌の上で調和するあいだ

そして全ての気孔から瞬間的な火で  
あなたの意思のある魂は蒸発するあいだに  
いま私たちに突然変異を起こさせ  
ゆっくりした時間の力の中で衰えるよりも  
好色な鳥の犠牲者のように  
むしろすぐに私たちの時間を貪ろうではないか。  
私たちに全ての強さと甘美さを  
一つの球に巻き上げさせ  
人生の鉄の扉を通して  
乱暴な争いで私たちの喜びを引き裂かせようで  
はないか。  
このように、私たちは太陽を静止させておくこ  
とはできないが、  
それでも太陽を運行させるつもりだ。

## 17. ドーバービーチ

マシュー・アーノルド

今夜はビーチが静かだ。  
潮が満ちて、海峡の上に  
月が美しく出ている。フランスの海岸の上に光が  
きらめき過ぎ去る。イギリスの岸が  
穏やかな湾の中に  
かすかにひかり広大にひろがる。  
窓に近寄ると、夜の空気が甘い！  
ただ、海と月の白い土地が出会う  
しぶきの長い線  
聞け！耳障りな小石の轟を  
波が引き戻したり、放り投げたりする音  
波が戻るところで、岸の高いところで  
はじまったり、とまったり、そしてまたはじまる  
ゆっくりとしたふるえるリズムで  
永遠の悲しみの調べをもたらす。

ソフォクレスはずっと前に  
エーゲ海でその音を聞き、そして  
彼の精神に濁った引き潮をもたらし  
人間のみじめさを充滿させた  
わたしたちはまた音の中に思考を見つけた  
この遠い北の海のそばでそれを聞いている。

信仰の海は  
かつて、また、満たされ、丸い大地の岸は  
まるで輝く鉄でおおわれた囲いのようにであった。  
しかしいまはただ聞くだけだ  
その憂鬱、長く、引き上げていく轟が  
撤退していくのを、夜風の息になり  
落胆を引き起こす広大なふちと  
世界のむきだしの小石を下りていくのを。

ああ愛よ、わたしたちを互いに真実として存在  
させてくれ  
世界が  
夢の土地のようにわたしたちの前にあるように  
みえ  
さまざま、うつくしく、新しいものが  
本当に喜びもなく、愛もなく、光もない  
確実なことも、平和も、苦痛のための助けもない。  
そしてわたしたちはここで暗がりの平原に  
苦闘と飛翔の混乱した警報で吹き払われるよう  
なものだ。  
無知な陸軍が夜に衝突するところで。

## 18. 虎

ウィリアム・ブレイク

虎よ、虎よ、輝き燃える  
夜の森の中に  
どんな不滅の手が、瞳が  
汝の恐ろしい調和を形成するのか？

どれくらいの地中の深さで、空の高みで  
汝の瞳の炎を燃やすのか？  
どんな翼であえて彼は大志を抱くのか？  
どんな手が？あえてその炎を掴むのか？

どんな肩が、どんな技術が  
汝の心筋を縫いあわせるのか？  
汝の鼓動は打ち始めるとき  
どんな恐るべき手が、また足が？

どんな金槌が？どんな鎖が？  
どんな竈の中で汝の脳を？  
どんな鉄床が？どんな恐ろしい支配が  
あえてその致死の脅威を握りしめるのか？

星が彼らの槍を投げ落とし  
彼らの涙で天を濡らしたときに  
彼は笑ったのだろうか、自分の作品を見て？  
生贄の羊を作った彼が汝を作ったのだろうか？

虎よ！虎よ！輝き燃える  
夜の森に  
どんな不滅の存在の手が、瞳が  
あえて汝の恐るべき均衡をもたらしたのか？

## 19. 12の歌

ウィスタン・ヒュー・オーデン

### IX

全ての目覚まし時計を止めて、電話を切り  
旨味の多い骨で犬が吠えるのをやめさせ  
音量を和らげられたドラムとピアノの沈黙は  
棺を運び出し、嘆く人をまねく。

飛行機に空で「彼は死んだ」と書かせ  
嘆いている人々の頭上を巡回させる  
民衆は白いえり首に  
喪章をつけお辞儀する  
交通警察は黒い綿の手袋をつけている。

彼は私の北に、南に、東に、西にいた  
私の平日の労働時間中も休暇の日曜も  
昼も深夜も喋っているときも歌っているときも  
愛は永遠に続くと思っていた それは間違い  
だった。

今は星は求められていない 全てを外に出し  
月を取り込み、太陽を取り除く  
大洋を流れ出させ木を押し流す。



今まで以上に良くなるものは何もないはずだから。

## 20. アドルストロップ

エドワード・トマス

そうだ。私はアドルストロップを覚えている  
その名前を なぜかというところの午後  
暑い日、特急電車が停車した  
いつもとは違った様子で。6月の下旬だった。

蒸気がシューッと音を立てた。誰かが喉の通り  
をよくした。

誰もいない、がらんとした駅のホームに  
誰も来ない。私が見たのは  
アドルストロップだった その名前だけ

そしてヤナギと、ヤナギソウと草  
そしてシモツケソウと乾燥した干し草の山  
空高くにある小さな雲よりも少しも劣らず  
孤独に美しく静止していた。

その瞬間一匹の黒い鳥が近くで  
歌うと、彼の周りにはどんどん霞みがかり  
オックスフォードシャーとグロスターシャーの  
全ての鳥へと  
どんどん遠くへ伝わって行った。

## 21. 軍人

ルパート・ブルック

もし私が死ぬとしたら、私についてこれだけは  
考えて欲しい  
ずっとイングランドの所有である外国の平原に  
秘密の場所がある  
肥沃な大地で  
もっとたくさんの遺体が隠されているはずだ。  
イングランドの生み出した遺体は、姿をなし  
意識をもって  
かつて彼女が愛した花、ぶらついた道

イングランドそのものを与え、イングランドの  
空気を吸いながら  
川で洗われ、故郷の日光に祝福された。

そして考えてほしい、この心臓から、全ての邪悪  
な影が去り  
永遠の精神の磁力が  
イングランドに与えられた思考をどこかに追い  
やってしまうのに劣らない  
彼女の光景と音 彼女の一日と同じくらい幸せ  
な夢  
笑い 友人のこと 優しさ  
心の中の平穏を イングランドの天国の下で。

## 22. 警告

ヘンリー・ジョセフ

私が老女になったときは紫を着よう  
それとは似合わない赤い帽子と一緒に、そう、  
私には似合わないやつ。  
それで年金をブランデーと夏用の手袋とサテン  
のサンダルに使って  
バターを買うお金は持っていないと言うのだ。  
疲れたときは歩道に座って  
店のサンプルを食い漁って非常ボタンを押し  
公共の手すりに沿って私の杖を運ばせ  
若い頃の真面目さにならって化粧する。  
私は雨の中スリッパで出て行き  
他人の家の庭で花を摘み  
唾を吐くようになる。

ひどいシャツを着てもっと太れるし  
一度で3ポンドのソーセージを食べれるし  
一週間でパンとピクルスだけってこともある  
買い貯められたペンと鉛筆とビール用マットと  
道具が箱の中にある。

しかし私たちは湿気らない服を持たないといけ  
ないし  
家賃は払わないといけないし、道路で悪態をつ

いてはいけない

子どもに良いお手本を見せないといけない。  
ディナーに行く友達がいないといけないし、新聞は読まないとまずいのだ。

私は今から少しずつ練習すべきか？  
そうすれば私を知っている人は衝撃を受けたり  
驚いたりしすぎることはない  
突然私が老いたとき、紫を着始めたとしても。

### 23. 海熱

ジョン・マスターフィールド

私はもう一度海に降りていかなければならない  
孤独な海と空に  
私が求めるものは背の高い船と操舵するための星  
舵輪の反動と風の歌と白い帆が  
揺れている  
海の表面の灰色の霧と夜明けが現れる。

私はもう一度海に降りなければならぬ 流れる  
潮の呼びかけが  
荒々しいために 否定されないかもしれない  
はっきりとした呼びかけのために  
私が求めるものは白い雲が飛んで行く風の強い日  
浴びせられたしぶきと茶色い泡 海のカモメが  
鳴いている。

私はもう一度海に降りなければならぬ 放浪  
するジプシーの生活  
カモメの道と鯨の道 風がまるで  
研がれたナイフのようなところを  
私が求めるものは笑っている仲間の放浪者の陽  
気な作り話  
長いサービス時間が終わった後の静かな眠りと甘い夢。

### 24. ウェストミンスター橋で

ウィリアム・ワーズワース

1802年9月3日

地球はもっと美しい何かを見せる必要はない。  
その荘厳さに大変人を感動させる光景を  
通り過ぎることのできるような男性はなまくら  
な魂なのだろう  
この都市は衣服のように

朝の美しさを 着ているようだ静寂で人気もなく  
船、塔、ドーム、劇場と寺が  
広場と空に開かれていて  
煙のない大気に全てが輝ききらめいている。

太陽が彼の最初の栄華に谷、岩、丘を  
もっと美しく没頭させることはなかった  
私は見たことがなかった 感じたことも こんなにも深い静けさを！

川は自身の甘美な意思によりとうとうと流れる  
神よ！まさに家々は眠っているように見える  
そして偉大なる心はすべて音もなく存在している！

### 25. ポルトガル語のソネット

エリザベス・バレット・ブラウニング

43

あなたのことをどうやって愛せばいい？方法を  
数えさせてほしい。  
私はあなたを愛している 深みと広がりが高く  
私の魂は到達できる 視界から外れたとき  
存在の終わりと理想的な恩恵のために。  
私はあなたを愛している 毎日の最も静かに必要  
なレベルで



太陽やキャンドルの光のそばで。  
 私は自由にあなたを愛している 男が光を求め  
 て戦うように  
 純粹に愛している 賞賛されても正気に戻るみ  
 たいに。  
 あなたを愛している 私の古い信念の中に  
 使うためにおいてある情熱で 私の幼年期の信  
 念で。

私はあなたを愛している 私が失うと思ってい  
 た愛で  
 私の失われた聖人とともに 私はあなたを愛し  
 ている 呼吸で  
 微笑みで 涙で 私の全人生をかけて！ もし  
 神が選ぶなら  
 私は死後もよりよくあなたを愛する他はない。